

将軍木

将軍木は樹齢 600 年を超えるムクの巨木である。菊池市中心部にあり、地域の歴史上最も著名な人物の一人である懐良（かねなが）親王（「かねよし」とも；1329-1383）を象徴している。

懐良親王は後醍醐天皇（1288-1339）の皇子で、後醍醐が足利幕府と対立したため、朝廷は分裂した。後醍醐の南朝と足利を後ろ盾とする北朝が天下の覇権を争い、後醍醐は南朝と菊池氏などの地方武士団との同盟を築くため、懐良を九州に派遣した。

懐良と彼の信頼する武将菊池武光（1319-1373）の指揮の下、南朝方は九州全土を征服した。その支配は長く続かなかったが、この時期が菊池氏の政治的影響力の絶頂期であったため、懐良は今でも地元の英雄として語り継がれている。

懐良親王にちなんで名付けられた将軍木は、懐良自身が植えたとも、彼が地面に刺した杖から生えたとも言われている。皇子は近くの菊池神社の祭神として祀られている。毎年 10 月 13 日、皇子の霊はこの木の枝の下にある小さな祠に移される。そして、皇子が生前目撃した松囃子の芸能が、木の向かいにある伝統的な舞台で披露される。観客は皇子の視界を遮らないよう、舞台と木の間に立ち入ることは許されない。